

生

粹

能村 研三

谷中清水町

「沖」創刊五十五周年記念祝賀会の翌日の十月三十一日には先師登四郎ゆかりの谷中、上野を散策する吟行会を予定している。

先日、下見を兼ねて能村家菩提寺の谷中延壽寺より、登四郎生誕の地である谷中清水町から上野へ向けて歩いてみた。

登四郎が書いた随筆で、自らの「ふるさと」である谷中清水町について書いた文章が二つあった。その中の一つを紹介する。

谷中清水町という処は私が生まれ、幼時をすごしたところで、大正の初めのころは静かな屋敷町で、土塀に囲われた家がつづいていった。上野と谷中の台地の下にあつたのでむしろ下町に属するのであるが、ふしぎと山の手の優雅さが流れていた。日本画家が多く住んでいて私の家の後が池上秀畝、その少し先に松本楓湖画伯の家があつた。町全体が朝霧につつまれたようにおどかでゆつたりとしていた。朝は動物園で餌を求める百禽の声に町は明け、夜更になると獣たちの咆哮する声が不気味にきこえた。幼い私はあれは何かと

聞くと母は虎の声だよ、こわいから早くおやすみ、といって寝かせたそうである。

『花鎮め』より

谷中清水町は三河吉田藩松平氏の下屋敷があつた場所、この一帯は寛永寺の領地であつたが、寛永十年に松平信綱に与えられ、明治五年に大河内家の屋敷地が町として起立し、「谷中清水町」と命名された。この名前の由来は、護国院前にあつた「清水門」にちなむという説と、町内に清らかな泉が湧いていたためという説があるそうだ。

現在は谷中清水町という地名はなく、わずかに谷中清水町公園と清水坂に名残があるだけだが、清水坂を下ると上野高校があり、上野動物園へと続く。

登四郎の生地である池之端四丁目一番地あたりは、「屋敷町の大通り」と言われている所に面していて、古くからの旅館も数軒あつた。その一つに「勝太郎旅館」という名が目を引いた。全く関係ないだろうが、登四郎の兄弟の一番目の兄の名前が「勝太郎」であつた。

地下鉄の爽やかに過ぐ橋二つ

絡む木に選り好みなく葛の花

淡っかな流燈ひとつ逆潮に

勘がよく働く日なり今日は処暑

沖つ波崩れつ湧きつ野分立つ

縦並びの庖丁五本今朝の秋

胸襟を開き色なき風わたる

一心に咲くしかあらず曼珠沙華

生粋の朱を違はず唐辛子

蟻地獄闇とかかはりなく深し

能村 研三